

□ ピアノ

真嶋雄大

2014年は前代未聞のスキヤングルが噴出、クラシック音楽業界のみならず日本の社会が大きな衝撃に揺れた。佐村河内守のゴーストライター騒動である。顛末の詳細は差し控えるが、過去にはモーツァルトに「レクイエム」を依頼し、自らの創作として発表しようとしたフランツ・フォン・ヴァルゼック・シュトゥーパハ伯爵の例などもあるものの、18世紀とは著作権の認識自体まったく異なる。少なくとも現代の創作活動を愚弄する許し難い行為であり、当該者のみならず、煽り立てた周囲も猛省すべきであろう。また週刊文春には、指揮者金聖響の醜聞も取り沙汰され、クラシック音楽界の資質、根幹が問われた年でもあった。

さて、演奏年鑑によるコンサート情報の累計を鑑みると、1992年に全国で9135回あったコンサートは微増ないし横ばいを続け、2001年には1万1千回を数えた。もちろんこの数字はすべてを網羅する訳ではないので、あくまで参考にしていただきたいが、しかし2008年、2009年はリーマン・ショックの影響であろう、再び減少傾向を示す。それでも2010年にはまた1万1千回台へと復帰、昨年は12097回を記録している。その中でピアノ、チェンバロ、オルガン等鍵盤部門は、おおよそ14%から18%くらいの中で推移している。これは独奏のみであり、室内楽や、弦や管楽器が主体のピアノを伴う演奏会は入っていない。2014年は、統計によると1864回がピアノ・リサイタルという数字が出ているが、根強いピアノ人気に支えられていると言えるだろう。

一方で世界の国際コンクール事情などを俯瞰すると、中国や韓国などの台頭もあって、一時趨勢を極めた日本のコンテスタントたちの活躍にやや翳りがあることと、ピアニストを目指す分母の数自体が減少している現実を痛感せざるを得ない。これは世界的な傾向でもあるが、厳しい研鑽を積んでも成就するかわからないプロのピアニストを志すより、音楽を楽しみとして享受し、他の仕事を選ぶ現代の若者気質が原因のひとつであろう。2015年の今年は、ショパン国際、チャイコフスキー国際、リーズ国際、そして浜松国際と、世界を代表するピアノ・コンクールが奇しくも数々重なって開催される。果たしてどんな才能が世界に飛び立つか、今後のピアノ界を占う意味でも大変重要な年になるだろう。

2014年は、東京に新しいホールがお目見えした。読売新聞東京本社新社屋内にオープンした「よみうり大手町ホール」である。開館記念のコンサートには、読売日響、ラ・プティット・バンドの他、河村尚子、辻井伸行、三輪郁らのピアニストが登場、華を添えた。この年、作曲家のメモリアル・イヤーとしては、グルック生誕300年、R.シュトラウスの生誕150年などがあったが、ピアノとの関連性は薄く、けれども8月、音楽の友ホールにおいて、昨年没後140年を迎えた「ブルグミュラー・フェスティバル」という極めて興味深い音楽祭が開かれた。普段あまり大きく扱われない作曲家だけに、会期は2日間ながらトーク・ショー、人気曲の投票、スライド上映、講座、そして黒田亜樹による演奏など多彩に繰り広げられ、参加者たちの満足そうな表情が実に印象的であった。

日本で音楽祭と名のつくものは毎年開催されているものが殆どであり、各々盛況が伝えられているが、話題を呼んだのは第16回別府アルゲリッチ音楽祭。マルタ・アルゲリッチとゴドン・

クレーメルという当代きっての2大巨匠のデュオはさすがに圧倒的、大きな拍手が贈られた。また今年、アルゲリッチとステイーヴン・コヴァセヴィッチとの間に生まれた三女ステファニーが監督を務めた映画「アルゲリッチ、私こそ、音楽」が封切られ、素顔のアルゲリッチを描いて好評だった。

国内でのコンクールも大小様々開催され、新たな才能が陽の目をみた。4年に1度の「第3回高松国際ピアノコンクール」では、第1位ムン・ジョン（韓国）、第2位アンドレイ・シチコ（ベラルーシ）、第3位ノ・イエジン（韓国）という結果を得たが、その後ムン・ジョンはジュネーブ国際音楽コンクールにも優勝している。また日本国籍を有する者、または日本国内に在住する者という受験資格を求める「野島稔・よこすかピアノコンクール」は第5回を迎え、第1位に野上真梨子、第2位に高倉圭吾、第2位に白瀬元という結果となった。コンクールの開催に先立ち、審査員長の野島稔をはじめ、迫昭嘉、若林顕、神谷郁代、野平一郎といった審査員たちが一晩でベートーヴェンのピアノ協奏曲全5曲をそれぞれ演奏、鮮やかな手腕を示した。共演は広上淳一指揮東京交響楽団。

ジュニア・コンクールも盛んである。毎年千葉で行われている「国際ジュニアコンクール」は今年で7回を数え、未就学児から中学生までの精鋭たちが日頃の成果を競った。また16歳までの子どもたちを対象にした「スタインウェイ・コンクールin ジャパン」は、名器スタインウェイに親しむ機会を提供し、演奏の楽しさを実感してもらうことが目的だが、地区審査会で「最優秀賞」を受賞した31名がそれぞれ個性的な演奏で挑戦した。ちなみにスタインウェイ・サンズの日本法人であるスタインウェイ・ジャパンは本社オフィスを天王洲アイルに移転、新たな歴史を刻み始めている。

また日本人ピアニストの活動も顕著である。デビュー55周年を迎えた中村絃子は、記念全国ツアーを敢行、山田和樹指揮横浜シンフォニエッタとの共演で、モーツァルト「ピアノ協奏曲第24番、第26番（戴冠式）」等を収録、記念ディスクとしてリリースした。今年デビュー30周年を迎える小山実雅恵も、現在12年24回に及ぶ遠大なリサイタル・シリーズ「ピアノで綴るロマンの旅」を続行しており、2014年は第17回と第18回を終えた。

他にも今川映美子が、室内楽も含めて8年続いた、まさにシューベルト・アールデに現代に蘇らせたシューベルト・ツィクルスを12回で完結させ、中井恒仁によるブラームスのピアノ全曲（ソロ・連弾・2台）シリーズも、10年の時を経て8回で大団円を迎えた。横山幸雄は毎年特異な挑戦を続け、今回はショパンの、遺作を含む全ピアノ独奏曲目解説211曲と協奏作品の独奏ヴァージョン6曲を21時間で弾き切るという超人ぶりを見せ、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲を松本和将と小菅優らが続行、新鋭の崎谷明弘も全曲録音をスタートさせた。

海外でも日本人ピアニストが活躍、児玉桃はウイグモアホールにおいて4月、同ホールと東京オペラシティとの共同委嘱である細川俊夫「ピアノのためのエチュード全6曲」を英国初演、6月には左手のピアニスト館野泉が、ドイツ&チェコ・ツアーのフィナーレとしてベルリンのフィルハーモニー室内楽ホールでソロ・リサイタルを開き、聴衆はスタンディング・オベーションで熱狂した。

海外からの来日ピアニストも相変わらず盛況で、89歳のチッコリーニ、86歳のパドゥラ＝スコダをはじめ、ツイメルマン、ポリス、シフ、アンソレス、キーシン、アフアナシエフ、プレトニョフ、そしてボゴリッチなど現代の大ピアニストたちが、その強烈なピアニズムを示した。

なお最近では、ネット、You tube等を聴取することで満足してしまうファンが増えていると聞く。一概に否定はしないが、コンサートやCDなど原体験での感動に勝るものはない。今後の音楽界全体の課題でもある。